佐久の先人たち㊿

故郷に美術館を贈った実業家

油井一二（ゆい いちじ）

（1909～1992年）

上京して様々な職業を経験するが、画商の道に活路を見いだし、さらに美術年鑑社長として、天性の企画力と実行力により成功し、そのコレクションの寄贈を受け佐久市立近代美術館が誕生した。

●上京して絵画の出張販売員に

油井一二は、一九〇九（明治42）年一〇月三〇日、北佐久郡三井村香坂（現佐久市香坂）の農家に生まれた。一五歳で三井尋常小学校（現東小）を卒業し農業に従事するが、一八歳の時肋膜炎にかかり、約四～五ヶ月の療養を余儀なくされた。その間将来への思いを巡らし、姉をたよって上京することを決意する。一九二八年五月、一九歳の油井は上京し、姉の夫の経営する電気工事会社に勤めた。

一九二九年、二〇歳のとき徴兵され、翌年宇都宮の野砲第二〇連隊に入営する。しかし翌年には帰休除隊となり、上京して東京中野にあった東亜美術協会に絵画出張販売員として入社する。二二歳の油井にとって、これが美術業歴の第一歩となった。

この仕事は、数人が一組となって、渡された数十本の掛け軸を訪問販売するというもので、初めての担当地区は横浜、三島、小田原方面で、約三週間でやっと五、六本が売れた。その後担当地区は朝鮮に移った。油井はこうした経験のなかから商売のコツを先輩に学び、自信を得ていった。

●独立して美術店を開業

油井はその後東洋美術協会に移り、一九三三（昭和8）年、市瀬アイ（通称愛子）と結婚する。二五歳の一九三四年、油井を含めて三人の出資により日東美術協会を創設、独立する。ここでは販売を一手に引き受け、日本各地はもとより中国、朝鮮、台湾にも足を伸ばし、文字通り東奔西走で事業を伸ばしていった。

しかし、一九三七年に日中戦争が勃発し、二度目の召集を受けて中国に派兵となり、日東美術協会は休業状態となった。一九三九年九月、二年の野戦勤務を経て帰郷すると、一〇月には日東美術協会の事業を再開する。他の二名の出資者はすでに手を引いていたため、これが油井の真の意味での独立となった。一九四一年、売りに出ていた上野広小路電停前の薬品店を買い取り、念願の美術店を開業する。

●戦後の再出発

一九四五（昭和20）年三月一〇日、東京大空襲のため店舗を焼失し、郷里香坂に疎開するが、六月一五日に三度目の召集を受け、九州の佐賀関の山砲隊に配属となり、八月一五日の敗戦をむかえる。郷里香坂に帰ると、妻が肺結核で病床についていた。懸命の看病も及ばず、翌年七月二一日に死去した。その年の九月、小諸の塩川志んと再婚し、翌年に上京して上野の寛永寺子院の修禅院の一角に間借りして、肖像画の受注も含め絵画販売を再開した。一九五二年には絵画販売会社香菊社を設立し、このころから同業者の紹介で武者小路実篤の作品を扱うようになった。三鷹の武者小路邸に足繁く通ううち、実篤を人生の師として敬慕するようになる。

●画商から美術年鑑社経営へ

一九四七（昭和22）年、油井は画商として戦後の再起を図っていた時、休刊していた『美術年鑑』の創刊者山田正道から復刊の相談を受け、これに五〇万円を出資する。一九六五年、山田から五〇〇万円で権利を買い取り、『美術年鑑』の発行人となり、翌年にはこれを株式会社に組織変更し、代表取締役社長に就任する。こうして油井は絵画販売の地方廻りをやめ、出版人としての歩みを始めた。

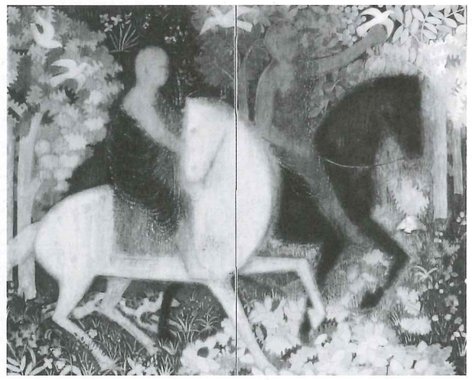
油井が初めて発行者となった『美術年鑑』の昭和41年度版

油井には画商としての経験から、こうした年鑑類に対する作家、画商、そして美術愛好家それぞれの立場からの要望を考慮する蓄積があった。そしてカラー口絵の導入、大判化など企画内容の充実をはかり、ブランドとしての『美術年鑑』を大きく育て上げていった。

一九七一年には、カラー版美術情報紙『新美術新聞』を創刊。『美術年鑑』と『新美術新聞』を柱に、日本の巨匠シリーズ『横山大観』『川合玉堂』をはじめ多くの美術書の出版を手がけ、美術専門出版社として経営を伸ばし、一九七八年には美術年鑑社関西営業所を大阪市西区に開設した。

●美術館設立の夢

昭和三〇年代に入ると、日本の高度経済成長を背景に業績は益々好調となった。この頃から油井は、「自分の好きな作品が集まるにしたがって、自分一人の力で美術館を建てようという夢を抱くようになった。」と著書『片目の達磨 続風呂敷画商一代記』で述べている。後に佐久市に寄贈され、佐久市立近代美術館開設の母体となった油井一二コレクションに含まれる作品は、一九五五年から一九八三年の間に制作された作品が、それ以前のものの約十倍の数を占めていることからも、この期間に油井が美術館の実現に向けて美術品の蒐集に力を注いだことがうかがえる。なかでも、一九六二年、平山郁夫という有望な作家がいるということで、東京都板橋区のアトリエを訪ね、その場で一九五九年院展出品作の『仏教伝来』と翌年出品作品の『天山南路（夜）』を、それぞれ四〇万円で譲り受けたと先の著書に記している。これが、油井コレクションの中でも佐久市立近代美術館を代表する作品となった。



平山郁夫 作『仏教伝来』（佐久市立近代美術館所蔵）
平山は、学徒勤労動員中に広島で被爆。29歳のとき白血球減少で悲観する中、祈るようにして生まれた作品。後に展開するシルクロードなどの仏教画の第一作。三蔵法師がインドから経典を持ち帰る苦難の模様を描く。2009年79歳で死去。

●油井コレクションを佐久市立近代美術館へ

一九七五（昭和50）年一二月、油井は佐久市新庁舎竣工を記念して蒐集美術品二五点を佐久市に寄贈した。二年後には寄贈作品は七〇〇点を超し、油井一二コレクションを収蔵する美術館建設の機運が熟していった。こうして、一九八三年五月、佐久市立近代美術館が開館した。

一九八九年には、油井に佐久市名誉市民の称号が贈られた。翌年四月、佐久市立近代美術館にカルチャー館油井一二記念館が併設され新装開館。この年一〇月、油井は取締役会長に、長男一人が代表取締役社長に就任した。二年後の一九九二年七月二一日、油井は東京の病院で八二年の生涯を閉じた。現在、佐久市立近代美術館の収蔵品は、油井父子二代にわたる寄贈によって、三千点を超えている。

（小山雅比古）

○参考文献
油井一二著『風呂敷画商一代記 商売から得た人生の苦楽』㈱美術年鑑社 一九八八
油井一二著『片目の達磨 続風呂敷画商一代記』㈱美術年鑑社 一九九〇
田中日佐夫著『現代の美術コレクター』日本経済新聞社 一九九五